



つながろう

# CO-OPアクション情報

2013年2月27日

第 26 号

## 帰村のきっかけをつくりたい

コープふくしま、帰村宣言「川内村」への共同購入展開



川内小学校の教職員に注文の品をお届けする横山さん。

福島県双葉郡川内村は、東京電力福島第一原発事故で、警戒区域と緊急時避難準備区域に指定されていましたが、除染によって生活が可能と村が判断し、2012年1月30日に「帰村宣言」を出しました。コープふくしまでは、10月より川内村で共同購入(宅配)を展開。現在68人が利用しています。



横山真太さん(左)と飯田ユキエさん。

「帰村宣言」が出された川内村では、住民約3,000人のうち約4割が村で生活を再開しています。

帰村のネックとなっているのは、除染が進展しているとはいえ放射性物質汚染に対する抵抗感があるということ

と、買い物施設などの生活環境が整っていないということです。

コープふくしまでは、震災前は川内村での共同購入(宅配)の配達を行っていませんでしたが、こうした状況を聞き、生協として役立てるか検討を開始。商工会など地元の商店主の方々に問題がないかを確認、信頼関係を結んだ上で共同購入を開始しました。現在では、40カ所に配達を行っており、68人が利用しています。

現在、川内村を担当するのは横山真太さん1人。「10月からずっと川内村への配達を担当していますが、徐々

に配達先が増えてきました。そろそろ段取りよく回らないと1日で回るのは難しくなっています」

利用者の一人、飯田ユキエさんは、お連れ合いと息子家族の2世帯で仮設住宅で暮らしています。「主人も息子もこの近くで働くようになって戻ってきました。お弁当のおかずにも生協で買った材料を使っていますよ」。いわき市や会津若松市にも息子たちが暮らしており、仮設住宅とはいえ故郷川内村に戻れたことで、お正月はみんな一緒に過ごすことができた笑顔で話してくれました。

# 店舗の売上金の一部を保養企画で活用

## 福島県南生協、白河市で保養プロジェクト実施



食事を楽しむ参加者。

福島県南生協は、1月29日、福島県白河市内の仮設住宅住民を対象にした保養企画を、白河市の「きつねうち温泉」で行ないました。同生協では、震災翌月の2011年4月から、毎月11日の店舗売り上げ金の1%を、子どもの健康被害の不安を抱えながら暮らす保護者の支援を

目的とする保養企画への資金としており、この度の企画は、その資金を使用して行なわれました。

会場となった「きつねうち温泉」は、本来は閉館日でしたが、同施設を運営している白河市の協力のもと、開館していただきました。企画は、組合員理事によって組み立てられ、43人の参加者は、温泉や食事、カラオケなどを満喫。仮設住宅の住民同士、交流する機会は少なく、今回の企画は「互いに交流が持てる」として大変喜ばれました。

参加者からは、「ひとときでもつらいことを忘れて楽しい時間を過ごせた」との感想が多い一方、「頭の中ではい

つも不安との戦いです。先の見えない人生をどう生きればいいのか？」といった意見も多く聞かれました。

福島県南生協は、不安を抱えている人に寄り添った支援活動を行なっていくため、参加者アンケートを参考に、今後も募金で運営資金を集めながら、保養プロジェクトを行なっていきたいとしています。



カラオケを満喫。

# 福島県民に寄り添い、茨城県でできることを見つけたい

## 茨城県生協連、福島県を訪問



飯館村を視察する参加者。

茨城県生協連は、1月31日と2月1日に福島県を訪問しました。福島県の生活実態を知った上で、これからの支援のあり方を考えるためです。企画には、茨城県生協連、いばらきコープ、パルシステム茨城、茨城県学校生協から役職員計15人が参加。飯館村、南相馬市小高地区周辺の視察や、放射線量測定、学習

会、交流会を行ないました。

1日目の午後は、福島市で、福島県生協連、コープふくしま、パルシステム福島、福島中央市民医療生協、新潟県生協連の組合員理事ら15人と報告交流会を開催。この交流会の中で、いばらきコープより組合員募金100万円、パルシステム茨城より募金30万円が福島県生協連に贈られました。

企画終了後には、「福島県の生協は、除染、放射線量測定、保養企画など、本当にさまざまな取り組みをやっており、福島県民に寄り添って事業を展開している姿に感動しました」との感想が聞かれました。

茨城県生協連専務理事の古山 均

さんは、「茨城県は福島に隣接しているので、子ども保養企画のより一層の充実を目指したい」と話します。また、福島県の子どもたちと親の思いを、茨城県民に知らせていくための企画なども考えていきたいとのこと。



組合員から寄せられた「東日本大震災復興支援募金」を、福島県生協連の熊谷純一会長（前列左）へ贈呈。

# 温泉で、仮設住宅生活の疲れを癒す

## いわて生協「リフレッシュツアー」開催

いわて生協・ふれあいサロン(窓口:いわて生協本部)では、被災者のためのお茶会や軽い体操、手芸などの会を定期的で開催しています。2012年より、「リフレッシュツアー」として、沿岸部の被災された方を温泉などにお連れし、心身共にゆっくりしてもらおうというツアーも始まりました。13年1月23日には、「花と緑と安らぎのある東和温泉」(岩手県花巻市東和町)への日帰りバスツアーが開催されました。



到着して一息つく参加者たち。おしゃべりをしたり、昼寝をしたり、各自、自由に過ごす。



折り紙で、節分の鬼づくり。「季節を感じられるものがあるとうれしいです」。

### ●離れた友達とも再会

ツアーに参加したのは、陸前高田市内の3カ所の仮設住宅(長部小学校グラウンド仮設住宅・二日市仮設団地・中田雇用促進住宅)の皆さん計31人です。

朝9時に長部小学校グラウンド仮設住宅を出発したバスは、二日市仮設団地と中田雇用促進住宅を經由して約2時間半で東和温泉に到着しました。

「あっ〇〇ちゃん!」「わあ、来ると思ってた!」「久しぶり!」バスに乗り込んでくる顔を見て声が上がります。

「今回のツアーは『温泉でのんびり』もうれしいけど、普段なかなか会えない別の仮設住宅の友だちや親類に会

えるのもとても楽しみだと思いますよ」

そう話すのは、ツアーのまとめ役をつとめるボランティアの菅野悦子さん。ご自身も被災されて仮設住宅で暮らしていらっしゃいます。「都会と違って、皆さん大きなお家に住んでいたの、狭い仮設住宅のくらしは何かと不自由だと思います。ご家族を亡くされている方も多いので、ひと時でもリフレッシュしていただきたいです」

### ●広いお風呂でリフレッシュ

東和温泉では、ご飯や温泉を楽しみました。

「普段は一人で食べるから。やっぱり、みんなで食べるのはいいね」、「仮設住宅のお風呂は狭いから、足を伸ばして入れるのはとても気持ちがいいね」との声。「皆さん、本当に遠くからボランティアで来てくれて、驚くね。自分だったら、できないと思う。トシ? 聞かないでよ(笑)」との一言に、笑いが広がります。

お風呂上りは、おしゃべりに興じ

たり、節分に飾る「鬼」を折り紙で作るなど、めいめいがゆっくりした時間を楽しみました。

「広いお座敷でみんなでお茶飲んでしゃべれるのは気が紛れるね」

座敷の窓の外は雪がたくさん残っていましたが、太陽の光でキラキラと輝いていました。

「ああ、雪がきれいだねえ」とおっしゃった方は、「雪や月を『きれい』と思えるようになったのは、つい最近のことなの」と話していました。

この日は、傾聴ボランティアの吉田良子さんもスタッフとして参加していたことが功を奏したのか、被災当時の話を「初めて話すことができました」とおっしゃる方もいらっしゃいました。吉田さんは、「皆さん、『ありがとう』としかおっしゃらないけど、本当は言いたいことはまだまだいっぱいあると思います」とのこと。

被災された方がリラクセスし、さまざまな話ができる雰囲気作りもリフレッシュツアーには求められています。

# めぐみ野イチゴ生産者へ作業用プレハブを贈呈 全国からの募金を利用

みやぎ生協はめぐみ野<sup>※</sup>生産者の農業・漁業復興を応援するため、農機具・資材などを贈るための募金活動に取り組んでいます。

メンバー（組合員）はもとより、取引先、全国の生協から温かい支援が寄せられ、募金額は2回の取り組みで約800万円に達しました。その募金のなかから、石巻市のめぐみ野イチゴ生産者・桜井正博さんに、作業用プレハブと簡易トイレが寄贈されました。

※ みやぎ生協の産直ブランドの名称。



寄贈されたプレハブの前で。JA 後藤さん（左）、いちご生産者の桜井さん。

## ●摘み取り後の作業、昼食、休憩の場ができた

桜井正博さんは、石巻工業港の背後にある釜地区に住んでいましたが、津波で家もイチゴのハウスも資材もすべて流されてしまいました。

すぐに市内内陸部と隣町の東松島市に畑を借り、国の補助事業を受けてハウスを導入した桜井さん。津波で流されてしまったイチゴの親株は、角田市のめぐみ野イチゴ生産農家に分けてもらいました。

9月に定植し、11月以降に収穫を開始。ところが……。 「パック詰めの作業が終わって集荷場まで持っていくときにラップの表面がうっすらと水蒸気で曇るんです」。それは、摘み取り後のパック詰め作業を湿度の高いハウスの中で行なっていたことから起こる現象でした。

桜井さんは、「何か困っていることはないか」とのみやぎ生協職員からの問い掛けに、早速この話をしました。「そうしたらプレハブを用意できるんじゃないか、という話になったんです」

2012年10月、8畳の作業用プレハブと簡易トイレが桜井さんに寄贈されました。

## ●再開を目指す生産者たちを支える

震災から2年。「がれき、地下水の塩水化、地盤沈下の問題で、生産を再開したいと思ってもできない農家が多い」と、JAいしのまき園芸課の後藤喜久雄さんは言います。「大きながれきは重機で取り除きましたが、土の中にはいまだに小さながれきが残っています。灌水<sup>かんすい</sup>に使っていた地下水は塩水化して使えず、農地は地盤沈下していて雨が降るとすぐに水がたまります」

被災して非居住区となった場所に畑をつくることは可能ですが、住む場所をどこにするかが問題になります。離れた場所に住めば、「通勤農業」をしなければなりません。

「家をどうするか、農地をどうするか、いろいろな意味で再開に踏み込まずに足踏み状態が続いています。桜井さんのように前へと進んでいる人もいますが、そういう人たちもやはり不安なのです。土地を借りるのも無料じゃない。今までの設備投資の借金を抱えながらまた借金を重ねる。再開するには、家や土地などの物理的な面と精神面、経済的な部分

をトータルで考えなければならぬと思っています」

JAいしのまき管内のめぐみ野生産者はイチゴ農家4人・キュウリ農家6人の計10人でした。イチゴ農家で被災したのは桜井さんともう1人。その方の土地も地下水の塩水化でイチゴをつくれないうでいます。キュウリ農家は6人全員が被災しました。うち1人が亡くなり、1人が離農するなか、1人はハウスを大修理して栽培を再開し、他の3人も再開を目指しています。

「ボランティアや募金などさまざまな支援をいただいた。農家はそういう思いに応えるためにも生産を再開したいと思っています」

全国からの“募金”というかたちの応援を受け取り、生産者は1歩1歩前に歩みを進めています。



プレハブの中で、イチゴのパック詰めをする桜井さん。

# 90人近くが、「なたね」の商品試食

## 食のみやぎ復興ネットワーク※「なたねプロジェクトおひろめ試食会」



サラダに「なたね油の和風ドレッシング」をかけ、試食。

1月29日、みやぎ生協岩沼店で、食のみやぎ復興ネットワークの「なたねプロジェクト」商品の「おひろめ試食会」が開催されました。同プロジェクトは、農地の復興を後押しするため、塩害に強いなたねを植え、商品化を行なう取り組みです。約2.7haの畑から2,600kgのなたねが収穫され、なたね油、

ドレッシング、菜の花からとれたはちみつを使った「はちみつ飴」へと商品化されました。

当日は、みやぎ生協組合員70人とプロジェクトに参加している12団体が集まりました。プロジェクトの概要報告や、なたね油が岩沼市内の学校給食で使用されていることなどの報告の後、試食が行なわれました。試食は、キャベツになたね油と塩で味つけしたものや、ドレッシングなどが提供されました。また、なたね油の香ばしさを知ってもらうために、精製していないなたね油と、精製した油を使ってさつまいもを揚げ、香り

の違いなどを楽しみました。

これら「なたねプロジェクト」の商品は、2月14日からみやぎ生協全店舗にて販売が行なわれており、新しい地域商品の誕生に、売れ行きは好評だということです。



「おひろめ試食会」後、早速商品を購入する人も。

※食を通した復興に取り組むプロジェクト。現在の参加団体は、216団体。

# 生協産直の継続でコミュニティーの再生を

## 全国産直研究交流会で思い新たに



JA新ふくしま 菅野専務の報告の様子。

2月8日、9日、「第29回 全国産直研究交流会」が東京都内で開催されました。

京都大学経営管理大学院の若林靖永教授による基調講演では、生協産直の今日的なあり方を振り返り、農村と都市をつなぎ、コミュニティーを再生することが生

協組合員の共感と参加を促す鍵になるという提起がありました。

続いて、コミュニティーの再生が最も切迫した課題になっている福島県の生産地の取り組み報告が、JA新ふくしま代表理事専務の菅野孝志さんからありました。

東京電力福島第一原発事故の発生当初から、農地の除染、福島大学や生協などと連携した土壌調査活動、モニタリングセンターの開設、米の全袋検査といった対策に取り組んできたこと、事故前の取引量に戻すにはまだ道半ばであることなどを聞き、決して風化させてはならない問題であることを参

加者は再認識しました。

日本生協連が設けた復興支援商品展示ブースでは、直売所で支援商品を取り扱いたいとの申し出が九州の産直団体からありました。

日本生協連産直事業委員会は、復興支援を継続して進めていくために、次回2014年2月の全国産直研究交流会を福島県で開催する予定です。



復興支援商品展示ブース。

# 「ボランティアスタッフが必要です」 「土壌スクリーニングプロジェクト」が雪で大幅な作業遅れ



ならコープから寄贈されたスクリーニング機。

JA新ふくしまと福島大学、福島県生協連が共同で行なう「土壌スクリーニングプロジェクト」では、土壌の放射性物質による汚染状況を把握し、その実態に沿って必要な対策を実施していくための測定調査（土壌スクリーニング）を2012年9月より行なっています。

このプロジェクトは、ボランティアスタッフの協力が必須であり、こ

れまで、コープネット事業連合、長野県生協連、パルスシステム連合会、生協総研、コープしが、ならコープ、大阪いずみ市民生協、コープ共済連、日本生協連がスタッフとして参加してきました。

プロジェクトの調査活動は、月曜日～木曜日の毎日行なわれていますが、降り積もる雪の影響で、今年1月から5週間中断せざるを得ず、再開が2月18日となりました。

このため、プロジェクトの進捗状況は、果樹園44%に対して田んぼは18%しか済んでおらず、計画から大きく遅れています。福島県生協連の平井有太さんは、「果樹園は、栽培をしながらも計測可能ですが、田んぼは作付けされたら、10月の収穫まで作業ができなくなります。

そのため、田植えまでに、なんとか急ピッチで作業を進めなければ」と危機感をつのらせます。

事務局では、作業効率を高めるため、ボランティア募集を1日最大4人から6人に増やしたり、参加者全員に義務付けられていた5時間の学習会をリピーターには免除したりするなど、対策を講じ実行する予定です。



果樹園の計測の様子。

※ 支援要請は、8ページ「支援募集情報」参照。

## 「伝えたい被災地」

このコーナーでは、ライター荒川和巳さんが被災地に行き、見たもの、感じたものをお伝えしていきます。

「募金や行政の助成金がどんどん減ってる。消費税が増税になったら募金をもっと減るから、やりにくくなるね」

岩手県内の仮設住宅への訪問ボランティアを続けているAさんはため息をついた。

ボランティアも、発災直後はNPO団体や個人のボランティアが多数被災地入りし、炊き出しなどに従事したが、発災から3年目を迎える現在はかなり減っている。被災地が忘れられつつある——そんな地元の不安がどんどん現実化していくようだ。

こんな時こそ生協の力に期待したい。地域のコミュニティーが失われても、「生協力」は健在なのだ。それを具体的に伝えるのが編集部役目であり、私の役目なのだと思つた。

1月20日に亡くなった101歳の詩人・柴田トヨさんは、東日本大震災の際に「被災者の皆様に」と題した詩を寄せていた。「もうすぐ百歳になる私 天国に行く日も 近いでしょう その時は 日射（ひざ）しとなり そよ風になって 皆様を応援します」（一部抜粋して掲載）。

支援の方法は、人の数だけある。



気仙沼港にて（13年1月、宮城県）。  
※写真と本文は関係ありません。

## 「かけあしの会」にマフラー贈呈 (いばらきコープ)

1月26日、27日に、ポケットファーム・どきどきつくば牛久店にて開催された「どきどき雪まつり」にて、いわて生協マリンコープ DORA 店長の菅原則夫さんが代表を務める復興プロジェクト「かけあしの会」(岩手県宮古市)のメンバーが復興応援商品を販売。いばらきコープ理事長の佐藤洋一さん、専務理事の鶴長義二さん、組合員理事3人や日本生協連職員も駆け付け、販売を手伝いました。

27日には、いばらきコープの組合員が編んだ約100個のマフラーが、いばらきコープ組合員理事から「かけあしの会」に贈られ、後日、いわて生協の共同購入(宅配)で配られました。



マフラー贈呈の様子。

## 「応援してくれるのが後押しになりました」 (パルシステム東京)

パルシステム東京は、都内で避難生活をおくる方を応援するための「パル・パラソルカフェ」などを、自治体などと連携しながら開催してきました。

1月29日には、新宿区に避難している方で組織された「百人町青空会」が開催する交流会に参加し、お茶菓子を提供しました。百人町青空会会長の山田仁さんは、「百人町青空会主催のイベントは今回が初めてです。今回、生協が応援してくれるのが後押しになって自分達でもやってみようと思いました」と話します。参加者からは、今後の不安に関する声や、感謝の声などが聞かれました。



イベントには約20の方が訪れた。

## いわて生協 宮古支部拡大担当 三浦 真さん

### ピックアップ! 生協の仲間たち



いわて生協 宮古支部拡大担当 三浦 真さん。

「共同購入が、多くの方に必要とされている事業だと震災をとおして、確信しました。」

そう話すのは、いわて生協宮古支部拡大担当の三浦 真さん。

三浦さんは、2011年4月より、生協への加入をおすすめする「拡大担当」として活躍しています。コープ東北サンネット事業連合\*すべての加盟生協のなかで1位の成績を連続で記録。「震災当時は、配送担当でした。津波の被害を大きく受けた地域の組合員さんのことが頭をよぎり、共同購入を必要としている人たちがたくさんいるはず、これはおすすめ活動を頑張らなければならないと思いました」と話します。

「被災地にいらっしゃった県外の方が、『仮設住宅に住んでいる方から元気をいただきました』とおっしゃ

いますが、本当にみんな元気ですね」と笑う三浦さん。

そんな三浦さんも、中学生のときから行なっているバンド活動で歌ったり、趣味のサーフィンに毎週通ったりしてプライベートも充実した日々を過ごしている。「『昔と同じに戻ろう』と意識している人が多いです」

震災直後の「生協さんありがとう」の声を胸に、日々誇りを持っておすすめ活動を行なう三浦さん。「『ふだんの暮らし』をこれからも、支えていきます」とサーフィンで日焼けしたまぶしい笑顔で話してくれました。

\*東北6県、9生協の事業連合。

## 支援募集情報

**岩手県生協連** 軽食付き自習スペース「山田ゾンタハウス『おらーほ』」への軽食支援として、180万円が必要です。可能な金額がかまいませんので、ご支援よろしくお願いたします。連絡先は、岩手県生協連専務理事 吉田 敏恵さん (019-684-2225) まで。

### いわて生協

- 田老町漁協「真崎わかめ」の販売協力。  
壊滅的な被害を受けた田老町漁協が、昨年春に収穫した「真崎わかめ」。放射性物質の風評で全国での販売が伸びず大量に残っています。岩手県、いわて生協の検査で放射性セシウムは検出されていません。ぜひ、販売にご協力をお願いします。  
連絡先：いわて生協事業本部常務理事 阿部 慎二さん (019-687-1441)。
- 被災地のお母さんたちや福祉作業所などの復興応援商品の販売協力。  
震災から2年近くたち、県内ではなかなか売れなくなってきています。委員会単位やイベントなどでの取り扱いなど、ご協力をお願いします。  
※取り扱い商品のリスト、条件などの資料を提供できます。
- 被災地ツアー（観光を含んでも可能）、被災地ボランティアツアー  
ご相談いただければ、企画や準備などのご要望にも応じます。少人数での視察のご要望にも対応します。なかなか進まない被災地の現状をぜひ知っていただきたいです。  
上記2点の連絡先：いわて生協組織本部 小野寺 真さん (019-603-8299 月～土 9:00～18:00) まで。

### みやぎ生協

- ふれあい喫茶で使用するお菓子（各地の名産品など）を募集しています。連絡先は、みやぎ生協ボランティアセンター (022-218-3880) まで。
- 「全国の会員生協に向けて被災地復興支援ツアー（モデルコース）」のご提案  
コープトラベルみやぎでは、「被災地を訪問したいけど、どうすればよいか分からない」などのお問い合わせに応じて、沿岸部での観光、お買い物を含めた団体・グループ向けの被災地視察モデルコースをご用意いたします。ご訪問の日程・人数に合わせてご手配・アレンジいたしますので、まずは電話・メールでお問い合わせください。お問い合わせ先：コープトラベルみやぎ担当：東（あずま）さん、または 高橋さん（電話番号：022-717-5081 メール：高橋 喜信 sn.m30853yt@todock.jp）まで。

#### 【被災地復興支援ツアーのモデルコース例】

旅行代金（お一人様）	大人 34,800 円／子ども（小学生）32,800 円／幼児（未就学児）30,800 円（4名様1室でご利用の場合） 3名様1室でご利用の場合は各 2,000 円増し、2名様1室でご利用の場合は各 3,000 円増し ※上記料金は20名様以上、中型バス利用で算出しております。人数の増減により旅行代金は変わる場合があります。
発着地	仙台空港の発着を想定していますが、仙台駅からでも可能です。（発着地より添乗員が同行します。）
旅行代金に含まれるもの	バス代金、ご宿泊代金（1泊2食）、昼食代（1日目、2日目）、遊覧船代、拝観料、観光ガイド代、ボランティアガイド代、添乗費用
行程（モデルコース）	宿泊予定ホテル：松島センチュリーホテル ・仙台空港発（10:00）====<仙台東部道路>====塩釜神社（参拝）====浦霞酒造 酒ギャラリー（お買物）====松島海岸（昼食）====松島散策：「五大堂・瑞巖寺（観光ガイド同行）」・円通院（数珠つくり体験）・松島さかな市場にてお買物====ホテルへ ・松島海岸（9:50）====遊覧船「芭蕉コース」（所要 50 分）====マリンゲート塩釜====鐘崎笹かま館又は伊達の牛タン本舗（昼食）====荒浜地区視察====閑上地区視察、閑上さいかい市場（お買物）====仙台空港（16:00 頃）

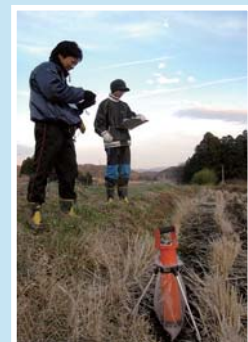
### 福島県生協連

- 「福島子ども保養プロジェクト」の①スタッフ、②大型連休の保養受け入れ先募集。  
①は、1カ月単位で毎週末参加可能な方を。  
②のご提案は、企画（日程、募集対象者、募集人数、スケジュール、参加者負担額等）を明確にした上で、ご連絡ください。  
連絡先は、福島県生協連 根本 喜代江さん (024-522-5334) まで。  
（保養の企画、運営、費用は、主催者にご負担いただきます。ご了承ください。）

新着

#### 【緊急要請】

- 「土壌スクリーニングプロジェクト」のボランティアを要請します。  
応募先は、「土壌スクリーニングプロジェクト」ホームページ内にて。  
（<http://fukushimakenren.sakura.ne.jp/dojo/>  
「土壌スクリーニングプロジェクト」で検索）。  
事務局ブログを通じ、現在の進捗状況なども報告しています。※ 関連記事：6 ページに掲載



土壌スクリーニング作業風景。

本号外部取材スタッフ：秋山健一郎、荒川和巳、早坂恵美